

斎場の雨音

高岡 啓次郎

一章

錆だらけの街には七日間一滴の雨もふつていなかった。泥にまみれた雪がやつと道路脇から姿を消し、坂の下にある並木のハコヤナギが硬いよろいを解いて芽を吹き出させている。湿った地面からは薄緑の小さな斑点がここかしこに現れはじめていた。

高志は高台から見える古びた工場群を背にしながら庭の丸太椅子に腰掛けて地下足袋のひもをゆるめた。裸足のまま、生えだした芝生にほてった足をのせると気持ちいい冷たさが伝わってくる。妻の良子は花柄のスカーフをかぶり、大きなマスクで顔をおおっている。そうしないとすぐに咳とくしゃみが止まらなくなるからだ。華奢な体で脚立に乗って冬の間

に汚れた窓を拭きはじめた。たったいま高志が上がってきた室蘭市宮の森の坂道に乱立

する家々のシャッターの陰から黒ずんだ残り雪が水を滴らせている。季節を待ちきれない命の息吹がアスファルトを裂いて顔を出していた。

「露のとうが顔を見せはじめたぞ。今年も露味嚙を作つてくれないか。おまえの味はおふくろ以上だからな」

「そんなこといったらお母さんが土の下から睨んでいるかもよ。でもそんなにおだてられたら作らないわけにはいかないわね」

「頼むな、季節のものを食べるのは楽しみだからさ」

「分かったわよ」

脚立からおりた良子は空を見た。

「今日も雨雲は来ないね」

埃っぽい風が絶えず吹いてくる。高志がこのころになるときまつて独特のほろ苦さを求めるのは母子家庭で育つた男の亡き母に対する思慕の表れであつたかもしれない。三年前の死別を引きずっていることは本人もよく分かつていた。死の重みと軽さ、飛び去る命のゆくえ、答えの出ない疑問がずっと渦をまいている。

高志はペランダの土間においてあるサンダルに履き替えて物置からホースを出してきた。水道につないで車の埃を流す。仕事の予定を考えながら、いつ姉からの連絡が来てでもいいように人の手配を頭に描いていた。建築用の板金業を営んでいる高志は一週間前から東室蘭にある鋳物工場の雨トイ取り付け作業にかかつていた。百メートルを超える長さのものは普通の住宅にはない。

作業は順調にすすみ、今日の午前中までにすべての作業を完了させてきた。それだけの長い距離に微妙な勾配をつけ、なめらかな水流を確保するのは難しい。だが晴天続きで作業は予定より早く進んだ。久しぶりに穏やかな週末の午後を過ごそうとしていたが気持ちはどこか落ち着かない。そんな夫の様子は妻に見抜かれている。

「あなた、気持ちのがのんびりできないでしょう」

「まあ、でも大きな仕事が終わってほっとしたよ。たまにはゆっくりするさ」

「そうするといいわ。ちよつと待っていてね、この窓を済ませたらお茶にするから」

車の埃を流した高志は背筋を伸ばして深呼吸した。庭の片隅に目をやる。

「いつの間にか福寿草が咲いている」

「先週から咲いてたわ」

「横にある紫の花はなんだい」

「ヒースよ。去年の秋に植えたの。冬を越せてよかった」

「きれいなものだ。命の力つてすごいな」

確実に太陽に向かって伸びる生命を見ると、それと同じだけの命が人知れず終わっているのだと思ってしまう。それでもこここの空気はやはり美味しい。高志はヒースを巻いて水道の横におき、改めて辺りをながめた。最近はずつくり庭を見たこともない。元請けの建設会社から年を追うごとに工事単価を下げるようにいわれている。逆に鉄板の仕入れ価格は急激に上がっているから生活していくためには仕事を数多

くこなす以外に道はないのだった。

良子が茶と和菓子のをせた盆を高志の傍らにおいた。むかしから仕事を終えると甘いものを口にしたくなる。いつもならすぐにパクつくのだが今日はなぜか見つめたまま言葉がない。胸の奥に何かが詰まった気分のまま茶を口にしたが菓子に手が出なかつた。

「あら、どうして食べないの。あなたの好きな栗が入っているのよ。さつき冷凍を解いておいたからちよつどいいと思う食べたくないの？」

「いや、そんなことはない」

高志は菓子を手のひらにのせて和紙の包みを解いた。小豆と栗の混じった甘い香りがした。良子は何もかも分かっているという眼差しで見つめている。地元にはない風味と歯ざわりをゆつくりと味わった。舌の上にとろけてくる旨み。目の奥にかすかな痛みを感じる。まぶたが熱をおびている。心の奥から突き上げる思いがある。それを吹っ切るように呑み込んでから高志はいった。

「良子、あした登別の現場へ見積りに行くから」

「日曜なのにご苦労様ね。こないだ話していたホテルなの」

「そう、温泉の湯けむりで屋根がひどく傷んだから銅版に換えるというのだよ。材料費は目が飛び出るほど高価だから失敗したら大損だぞ」

「それは大変ね。今日はゆっくり休んでおかないとね。腰が痛むといっていたじゃない。早めにお風呂に入つてのんびりしたらどう」

「そもいかなだろう」高志は立ち上がった。「あいつらが待っているからさ」

高志はアゴを動かして庭の境界線を見た。良子は一瞬なんのことかという顔をした。

「ああコニファアのことね、私がやるからいいですよ」

「いや、今年が俺がやる。今日は時間があるから」

最近、生きているものが妙にいとおしく思えてならない。

何を見ても儂げで、消えそうで、触れば折れてしまいそうで、ちよつとした風の動きでなくなってしまう気がする。良子は珍しいものでも見るように笑った。

「あなた変わったね。やつぱりお母さんを亡くしたからだ」と私は思うよ。何を見ているでもないの思ひ出してしまふのでしょうか」

皮肉を言っているわけでもないのは分かるが、高志は自分の内面を見透かされたと感じてかすかに腹立たしさをおぼえた。ふつきるように、つとめて男らしくいった。

「よしやるぞ。こいつらを俺が冬の牢獄から開放してやる」

ふり注ぐ光を浴びた十二本のコニファアが防雪用のワラを早くはずしてくれといわんばかりに身をよじらせている。そのことを高志はとつくに気づいていたが手を出せないでいた。だが今日はやるぞと意気込み、決然とすすみ出て彼らの縄を次々にといた。二メートル近い樹木は五ヶ月にわたって縛られて縮んでいた枝葉をたちまちのうちに伸ばし、大きく膨らんで青々とした姿を現した。

もういちどホースを伸ばしてたつぷりと水をそそぎ、縄と飛び散ったワラくずを片付けてから家に入った。良子はすぐ

に台所に立った。フローリングの床からワックスの匂いがした。今朝あなたがなくなつてからかけたという。

着替えをしながら、思いは再び仕事にむかっていた。自分も六十歳に届こうという年齢になり、いつまで高所での危険な仕事に耐えられるだろうか。そんな心配が頭をよぎる。後継者もない。良子との間にはとうとう子どもがでなかつた。手伝つてくれている兄も確実に体力が落ちてきている。危険が多い現場はますます引き受けられなくなるだろう。

そんなことを思いながら広い窓から庭を見渡しているとき電話が鳴った。いつになくけたたましい音がする。磨きたてのフローリングに反響しているせいもあるだろうが、多分に心理的なものだ。高志は思う。飛びついた受話器から思つたとおりの声が飛び込んできた。それは千葉に住む姉の美佐子からだった。六歳ちがいの姉の口から、いつもより沈んだ声が発せられたとき、高志は来るべき時がついに来たのだと思つた。それは夫の死を告げる電話だった。

「大変だったね。看病で疲れたでしょう。大丈夫かい」

「ええ、覚悟していたから大丈夫よ。みんな遠いので無理して来なくてもいいよ」

「いや行くよ。通夜や告別式の日付は決まつたの？」

「いま相談中なの。すぐに知らせるから待つてね。遠いのにすまないわね。良子さんによろしく言つてちょうだい。いま娘と手分けしてあちこちに電話しているの。じゃあまたね」

美佐子は気ぜわしい話し方を終えて電話を切つた。ひと月ほど前から何度も連絡を受けていた。かねてから肺がんで入

院していた夫がいよいよ弱つてしまい、医者には少ししかもたないと宣告されたというのだ。高志はどこか冷めた気持ちで聞いていた。そんな自分を薄情な人間だとも思う。義兄が過度の喫煙がおもな原因と思われる肺がんの末期と診断されたのは昨年秋だった。余命は半年といわれたらしいから、医師の予告どおりに病状は悪化の一途をたどっていたことになる。

まもなく電話がきた。和菓子職人である義兄の通夜と葬儀は千葉県流山市において、ごく少人数で執り行なわれるという。細かくメモをとった。すでに良子は忙しく動きまわって喪服の用意をととのえている。高志もすでに準備をはじめていた。登別での見積もりの仕事を二日だけ延期してもらい、現場の片付け仕事を仲間依頼したり関連業者に連絡をとったりした。

夫婦は翌日の午前の便で新千歳を発った。雨の気配は視界になく、乾いた大地と太陽を浴びた明るい緑が広がっていた。目を閉じてシートをたおす。エンジン音だけが聞こえてくる。高志はまだろみながら意識が遠のいていくのを感じていた。

それから数時間後に別の景色が彼らをとりにまいていた。春の微風が気持ちよく漂う昼下がりに、高志は良子と羽田からの高速バスに乗って流山市にある齋場へと向かっていた。

車窓から見えるのは散乱するまばゆい光の帯だった。車道に沿って、どこもかしこも満開の桜で彩られている。北国に比べて白さがきわだった花々は圧倒されるほどの生命力を

もって眼前を過ぎていった。一点の曇りもなく晴れ渡り、荒川の雄大な流れはそのときの空を反映して水彩絵の具を流したような透明な青さに輝いている。その日の自然の何もかもが、一個人が去ったという哀しい出来事とは無関係に非の打ちどころがないほど美しかった。

通夜が行われる夕方の齋場には西日が照りつけていた。天翔セレモニという洒落た名前のタイル張りの建物前には齋場の従業員らしき何人かが案内のために立っていた。高志たちが促されて中に入ると、広すぎる会場には線香の青い煙に混じって、美佐子とほんの一握りの親族が集まっていた。

想いの中で言葉を選びながら、沈痛な面持ちで近づいた高志と良子だったが、挨拶をかわした美佐子と二人の子どもたちは拍子抜けするほどしつかりしていて、憔悴した様子は見られず狼狽もしていなかった。義兄が闘病するようになってから今日までの事態を家族全員が冷静に受け入れているのが感じられた。その日は義兄の信条に基づいて日蓮宗の僧侶が弔いの経をあげた。それが終ったあと小柄で温和な面立ちの僧侶は義兄が釈迦の生誕の日である花祭りに生涯を終えたことに言及した。

「七十歳という年齢は少し早いようにも思えますが、考えようによつてはふさわしい寿命を全うしたと思うのがいいかもしれませぬ」

そのとき高志は、齋場に来るまでの道中に車窓から見えた白くたなびく雲海にも似た桜の饗宴を想い浮かべた。その雲のかなたには姉と義兄との、けして温かい関係とはいいい難い

四十年近い歳月が横たわつていた。そこには暗い淵がある。いま自分が義兄に対して抱いている冷ややかな思いは、淀んだ流れに生ずる芥や汚泥と共に渦をまきながら蓄積してきたものだつた。

高志がまだ二十歳だつたころ、小樽の料亭の二階で婚礼が執り行なわれ、姉の美佐子は和菓子職人の妻となつた。小樽出身の新郎は横浜の老舗で十代のころから奉公し、名のある品評会で賞をとるほどの職人になつていた。ほつそりとした背の高い美佐子に比べて、新郎は肩幅が広く、ずんぐりと背がちぢんでいて、目の大きな魚が笑つてるといつた表情をもち、への字に曲がつた唇から銀歯をのぞかせていた。実直そうには見えるが、姉の好みのタイプを知つていた高志にとつて新しく義兄になる人物が姉の理想からかけ離れた人のように思えた。

高志には美佐子が現実から逃げるように結婚に踏み切つた気がしてならなかつたが、その確信は時を経るにつれてますます強くなつた。当時の状況はその立場に立つた者なら誰もが逃避したいと思うにちがいない環境だつた。美佐子が十二歳のころに父親が行方をくらまし、家族は貧乏のどん底に投げ出された。やがて長女が嫁に行き、三歳違いの次女が失踪してからというもの、長時間働く母親にかわつて家事全般を引き受けざるを得なかつたのが美佐子であり、意気消沈した母や弟たちをずっと支え続けた。

美沙子は中学を出てすぐ呉服屋に勤めた。厳しい労働に加えて、帰宅してから家事のほとんどを引き受ける。同じ年頃

の娘たちがセーラー服を着て高校に通いながら青春を謳歌するのはまつたく縁遠い生活を送つていたわけだ。瞳が大きく利発な顔立ちの美佐子は着飾ればかなり美人の部類に入るに違いないが、そうした余裕は訪れなかつた。化粧もせず、髪の手入れもままならない習慣は長く続くことになる。

二人の弟は高校教育を受けることができたが高志の兄が卒業後に精神を病み、ひきこもりになつてしまつた。働こうとせず、部屋に閉じこもつたまま何年も出てこない。殻に閉じこもつた兄の心はいかんともし難く症状は悪化し、暴力的になつていつた。

そんなとき高志はどうしただろう。高校卒業後にさつさと小樽を離れて室蘭に就職してしまつた。汚泥のような現実から逃避しようという考えが隠れていたのは本人も後になるまで気づかなかつた。やがて高志は心が痛むようになった。自分はあるとき家族や心を病んだ兄に何の助力も与えないまま、すべての重荷を母や姉に押し付けて小樽を去つたのではなかつたか。そのことがひどく残酷な仕打ちに思えてならない。

高志が室蘭へ旅立つことに母は何の反対も不満もとなえなかつたが、出立が近づいた最後の時間、すでに老境に差し掛かつていた母が抱きついて涙を流し、小さなかすれた声でひとこと、見捨てないでねといつた。その言葉がいつまでも高志の胸を刺した。しかし美佐子は現実から逃げなかつた。高志がたまに室蘭から小樽に帰宅するとき、顔色のさえない十歳も老けた姉をなんども見た。

だが母親は、いつまでも娘を繋ぎとめておくことを望まな

かった。誰よりも苦勞を担つてくれた美佐子の幸福を願つていたに違いない行動に出たのだ。知人から見合いの話があつたとき、進んでその話を受けたのは母だつた。横浜に嫁ぐとなれば、最も頼りになる分身を手放すに等しいはずだ。高志がたまたま小樽に帰郷していたとき、美佐子を前にして母が話していた。

「母さんのことは心配しなくていいから、あんたの幸せを考えなさいね」

美佐子は視線を床に落としたまま、仲人が持ってきた写真を興味なさそうに見た。今まではどんな話もことわつてきたのに、二十代の後半にさしかかり、疲れ果てていたこのときは強く否定しなかつた。母は美佐子の肩に手をおいて長い髪を撫でながら続けた。

「良い人だといいわね。写真を見る分には、お世辞にも二枚目とはいえないけれど、職人としての腕も良いし真面目な人だというよ」

美佐子はうなずいた。開かれたドアの向こうにある世界にたじろいでいたのか、黙つて笑つていた。高志は静かに聞いていたが汽車の時間が来たので室蘭に帰つた。しばらく経つてから高志はその後のことを母から電話で聞くことになつた。

「美佐子は話が出てから夜も眠らずに考えていたよ」

「それで、姉さんはどうするの」

「やつと決めたみたいよ。仲人さんに返事をするギリギリの時だつた。先方は美佐子の写真を見てすごく気に入つてくれたよ」

「見合いの日取りは決まつたのかい」

「来週の日曜にするみたい。場所はまだはつきりしないらしいけど」

「姉さん大事にしてもらえるかな」

「そうだといいわね。あの子には本当に苦勞させたから。兄弟で一番大変だつたのは美佐子だから」

「本当にそうだと思う」と高志は答えた。

母性がにじみ出た温かく哀しげな声から、電話の向こうにいる母の姿がありありと高志のまぶたに浮かんでいった。遠くを見つめる目には涙が溢れていることだろう。同時に何かを決意する鈍い光が瞳の奥にあるに違いない気がした。

美佐子の婚礼があつた翌日、高志はゆうべ飲み過ぎたせいで昼まで実家で眠つていた。隣の部屋から母と姉が話す声が出た。ふすまが半分開いていて、枕もとにある三面鏡に二人が映っている。

「朝一番で仲人さんに挨拶してきたわ。あの人は実家に行つてから駅に来るの。まだお酒が抜けないみたいだからここに連れてこなかった」

「出発の汽車は何時なの」と母が聞いた。

「午後二時ちょうど。函館で世話になつた人が何人かいるから寄るそうよ。連絡船は夜の一〇時に出るの」

「東京に着くのは明日の朝になるのかな。いよいよだね」

母の声は急に詰まりぎみになつた。何とかして涙をこらえているのが分かる。姉の化粧を施した細い顔が鏡に映つた。

小さな唇をキッと結びながらたずんでゐる。

高志は起きて茶の間に入ろうとしたが思いとどまった。姉が何か大事なことを口に出そうとしている。そこには弟が入り込めない空気が感じられた。

「お母さんごめんなさい」

「どうして謝るの」

「だって私まえにいったよね。ずっと結婚しないで傍に居るつて」

「あんた何をいつているの。そんなこと忘れたよ。母さんは嬉しいんだよ。一年に一回、いや二年に一回でいいから遊びに行くよ。今から楽しみにしてる。旦那さんの作った和菓子もいっぱいご馳走になるからね」

「うん、ほんとに来てね。待つてるから」

そんな光景を高志は不思議な客観性を抱きながら見ていた。母は娘が幸福になれるという喜びと、遠い地に離ればなれにならねばならない哀しみを織り交ぜた、沈静した沼に映したような微笑をうかべている。背中がひどく丸く見える。高志は生々しい劇を観るような心地で鏡を覗いていた。美佐子が何かを差し出した。

「お母さん、これ受け取ってほしいの」

「何なのこれ」

母は美佐子が手渡した紙袋を開けた。

「まあ、これはあなたの貯金通帳じゃない。どうしたの」

「中を開いてみて」

「すごいね、八十万円もあるじゃない」

「私が貯めてきたものよ。これもらつてほしいの」

「とんでもない、何をいうの。こういうときは親が子どもにするものだよ」

「分かっているわ。でもそうさせてほしいの。私がいなくなれば収入も減るのよ。何かのときに使つてちょうだい、お願いだから。私は心配ないよ。優秀な和菓子職人さんに食べさせてもらえるもの」

「いや、だめだめ、都会はいろいろとお金がかかるのよ。それに結婚に水を差すわけではないけれど、自分の自由になるお金を持つていたほうがいいよ。必ず入用になるのだから」

「そのくらいは残してあるから心配ないの。私を誰だと思つているの」

美佐子は胸をたたいてアゴを上げながら高らかに笑つた。

そのあと、何度も受け取ることを固辞する母と、渡そうとする美佐子のやりとりが続いた。最後にはとうとう母親が折れて美佐子の贈り物を受け取つた。

だが母もまた自分が用意していたお金を美佐子に与えた。ふたりが贈り物を交換しながら泣いたり笑つたりしているのを高志は静かな感動をもって鏡越しに見つめていた。貯めていたお金のほとんども母親のために置いていくという光景は、嫁ぐ日に親からたくさんの金品をせしめていく世の若者の慣わしとは正反対の場面だろうと思つた。

美佐子は和菓子職人とともに横浜の妙蓮寺近くに住んだ。一年後に娘が生まれ、さらに二年後には息子ができた。その

ころ母親は、北海道から汽車と連絡船を乗り継いで何度か彼らの小さなアパートを訪れた。高志も母親についてその家を訪ねたことがある。義兄はそのときすでに、結婚式のときに見せた愛想の良い笑顔を見せることはなくなっていた。

高志は短時間で帰ったが、残った母親が経験したことは後日知ることになった。母親が居心地よく過ごせる環境が義兄から提供されることはなかったのだ。ときおり気まぐれにする話題といえ、自分の家系や親族の自慢話に終始し、間接的に美佐子の親族をさげすむ素ぶりをふりまいたという。そうした義兄の態度は年を重ねるほどにエスカレートし、母親が遊びにいくと、あからさまに無礼な応対ぶりを見せた。それほど遅い時間でもない夜に、積もる話を母娘がしていると、鬼の形相でふすまを叩き開けていう。

「うるさい！ 俺は朝が早いんだぞ」

飛びかからんばかりに母と美佐子を恫喝したというから話を聞いた高志は大いに腹が立った。そんなことが何度か続いたあと、美佐子は悲しげに思いつめた目で母に話したことがある。

「お母さんごめんさい。こんな不愉快な思いをさせてしまつて。最近は何に対してもああなのよ。近所の人からも、あんたはよく我慢してるねといわれるの。もうここには来ないほうがいいかもしれない。お母さんが傷つくだけなもの」

美佐子は話しながら悔し涙を流し、たえず唇を噛んでふるえていたという。思い出しながら息子を話している母親も泣いていた。美佐子の瞳から流れていたという涙は、いま母

親の流しているものと同じ泉から出ているに違いないと高志は思った。

その後、美佐子と義兄の関係はますます冷え冷えとしたものとなった。めつたに人の悪口を言わない母親もたまりかねて愚痴るのを止められなかった。高志の中に義兄への憤懣が溜まり、その反発心から美佐子の家を訪ねることをしなくなった。義兄の顔を思い出しても腹が立つてしかたがない。魚に似た眼差しと、狡猾そうな目と、計算高そうな銀歯の輝きと、上にへつらい、下を見下すような物言いが吐き気をもよおすほどに嫌になった。

義兄が数年後に横浜の老舗をやめて千葉に和菓子店を出すことになって高志は訪ねなかった。つましい暮らしをしていた母親が、開店祝い金を携えてそこを訪れたときは、さすがに義兄はそれなりの愛想を示したらしいが、いくらもしないで不遜な態度に逆戻りしてしまうのだった。

やがて母親は娘に会いたいという気持を押し殺したまま二度と美佐子の家に足を向けることをしなくなった。義兄は数年一度の里帰りさえ許さなかった。美佐子は子育てと和菓子店の下働きに埋没し、離婚の機会をうかがいながら、ずつしりと横たわる長い年月を過ごすことになった。

こうしたことが、老いた母親にどれほどの苦しみを与えていたかを示す出来事がある。それは母が亡くなる少し前のことだった。年末になると決まって評判の良い海産物店に行き、美佐子や夫が好む物を溢れるほど寛大に贈ることを母は続けていた。その金額たるや買物を手伝う高志がいつも驚くほ

どだった。母はひごろ自分ではめつたに食べない高価な食材を惜しみなく与えるのだつた。

母親からの荷物が届くと、すぐに美佐子はお礼の電話をかけてくる。めつたに話せない娘の声を聞くのが嬉しくてたまらない。ふだん意地の悪い義兄もそのときばかりは和菓子や餅をお返しに送ることを嫌がらない。美佐子は夫に内緒で母親への小遣いをそつと荷物に忍ばせる。

しかし、その年にかぎつて、到着予定日から数日たつても美佐子からの電話が入らなかつた。母親は胸騒ぎを感じたようだ。珍しいことだが、荷物が着いたかを確かめるために自分の方から電話をしたが不在だつた。数日後、母親は高志におびえた声でいつた。

「美佐子が何回かけても電話に出ないんだよ。あんたもかけてみてくれないかな。心配でたまらない」

高志は母親が心配しているのが荷物のことだと思つたが、まもなくそうではないことに気がつく。母親の苛立つた表情に押されて二度ほど電話をかけたが結果は同じだつた。

そのとき、八十を過ぎても高志たちがかなわないほど明晰な思考力を有していた冷静な母親が、常軌を逸していると思えるほどとり乱した。

「かけて、かけて、何度でも電話をかけてちょうだい」
語調がヒステリックにうわずっている。

「どこかに出かけているだけだよ。そんなに気にすることないさ」

高志がそういつても母親の心配は一向に収まらない。目は

脅えた鳥みたいに寒々と光り、唇を震わせながらいうのだ。

「そんなはずはない。和菓子屋だよ。年末のこんな忙しいときにいないはずはない」

「忙しいときだからこそ留守にするのだろうさ。母さんは何でも心配し過ぎるよ」

「違う！ 絶対違う！ 流山は犯罪が多いといつていたよ。美佐子は誰かに殺されているかもしれないよ」

「そんなバカなこと……」

尋常とは思えない取り乱しかたに高志はおののいた。母親が誰かにと口走つた言葉の中に、もしかしたら義兄を含めているのではないかという思いがすかに頭をよぎつた。その日は結局、電話が通じないまま終わつた。高志と良子はなんとか宥めすかして、ふるえる母親を横にならせた。

翌日の朝になつて、何のこともなく美佐子から母への礼の電話が入つた。

「連絡できなくてごめんね。忙しさで方々を飛び回つていたものだから」

「何回かけても出ないからあんたがどうかしたんじゃないかと思つたよ」

「そんなに何回もかけたの？ おかしいなあ。電話の調子がよくないの。外れていたのかもしれないね」

そのあと安堵しながら全員で笑い合つたが、会いたくても会えない娘に母親がどれほど狂おしいまでの心配を抱いていたかを推察すると、何ともやるせないものがあるのだつた。

高志は推論してみた。美佐子にとつて、大酒のみでわがままな夫への不満は数知れなかつただろうが、愛する母親を大切に扱わなかつたという一点にこそ、最も怒りの情念が集約されていたのではないか。孫をかまいがり、常に真面目で礼儀正しく接していた母を、なんら正当な理由もなく冷たく邪険な扱いをした夫を許せなかつたのではないか。

そうはいっても、自らが両親の離婚の狭間で数え切れない苦渋を舐めたことを考えると、二人の幼い子どもたちと同じ道を歩かせることへの決断がつかなくなつたに違いない。美佐子はとうとう義兄が七十歳で死を迎えるまで連れ添うことになつた。齋場に漂う香の煙の中で美佐子はしみじみとした口調で語つた。

「私たち夫婦はすでに心が離れていたから、正直いつてそんなにシヨックはないの。でも肺に癌が見つかつて衰えていく様子はやつぱり可哀相だつた。あの人もすぐ素直になつて穏やかに話をするようになったの。すまない、すまないという言葉が何度も出たわ。思えばこの半年間は、今まででいちばん夫婦らしい期間だつたかもしれない」

美佐子はしつかりとした口調でひと言ひと言をかみ締めるように語つた。

「あとのことは心配ないのよ。私はひとり自由で自由に生きていくから」

美佐子は利発な目線を高志と良子に等分に向けながら自嘲気味に微笑した。その、さばさばとした言い方のかげには、気難しい夫と四十年近く連れ添つてきた人生に対するやるせ

ない思いがにじみ出ているようだつた。

二章

「あんなに痩せて小さくなられて」

良子が棺に横たわる義兄の亡骸について話したとき、なぜか高志はすぐに遺体を見に行く気になれなかつた。数年前に亡くした母親の死からいまだに立ち直つていない高志にとつて遺体そのものを見ることに對して辛いものがあつたのは確かだが理由はそれだけではない。生前の母をあからさまに冷たく扱つた男の顔は進んで見たいと思えるものではなかつた。死に絶えた者に恨みをいつてもはじまらないが、死によつてすべての所業が精算されるとは思えなかつた。高志の中にあつた憎しみは厳然と生きていたのだつた。

読経が唱えられているあいだ、祭壇の上にかかげられた義兄の遺影だけを高志はじつと見つめていた。その写真は数年前に写されたものらしいが、この人にもこんな慈悲深い表情があつたのかと驚かされるほど温かみかみにじみ出た遺影だつた。それが高志には意外だつた。スーツとネクタイをしめた写真がどんなときに撮られたものなのかは分からない。おそらく義兄の心を穏やかにする何かがあつたのだろう。

齋場の前列には美佐子の左に息子がいて、右側には娘の家族が座つていた。ともに三十代に入つてゐる美佐子の娘と息

子。二人は極めて穏やかな氣質の人物だった。その温厚な心根については母親からよく聞かされていた。

「お婆ちゃんは何でも知ってるね」と男の子が手を握る。

「お婆ちゃん、お願いだからずつと帰らないでうちに来てね」と女の子がもうひとつの手にからみつく。

そんな孫からかけられた優しい言葉を、高志の母親は宝物を撫でるような表情で話してくれたものだった。

美佐子の娘は五年ほど前に結婚相手と子どもを見せるために北海道を訪問してくれたことがある。若いころの美佐子にそっくりな孫娘と曾孫に囲まれて母親がどれほど嬉しかったか、その喜びようを高志は目の当たりに見たのだった。お婆ちゃんが可愛がつてくれたことはいつまでも覚えていると、さまざま場面を思い出しながら孫娘は語った。

高志は再び推論してみた。美佐子の娘は実に性格がおっとりした人物で、たえず微笑を浮かべている。苛ついた表情をついぞ見せたことがない。もちろん私生活で腹をたてたりすることはあるだろうが、少なくとも人との関係において自分の欲望をわがままな形で前面に押し出すことをしない穏やかな資質の持ち主だ。

その弟はどうか。顔立ちこそ義兄に一番よく似ている。しかし意地の悪い狡猾なところが少しもない。灰汁あかの強さをすっかり脱色したみたいに誠実さが全体からにじみでている。

誰と話していても表情は穏やかで、少しはにかみながら笑う人は外見がそっくりでも中身によってこうも変わるものかと感心してしまうほどだ。

そのことが、どうにも不思議でならなかった。子どもである以上、半分は義兄の血を引いているわけだ。子どもに備わった美徳のある部分は父親からきているに違いないのだと思うと、義兄の中に埋もれていたのかもしれない未知の美徳について考えざるを得なかった。何か思い違いがあったのだろうか。もしかしたら、自分は義兄の本当の姿を見ないまま今日をむかえたのではないか。

そうかもしれないと高志は思った。そのことがどうにも哀しかった。動かしようがない巨大な岩だった。真の洞察力、識別力を持つことがいかに難しいことか。それが自分のような並の人間には属していない気がして、そのことが何とも口惜しかった。

通夜には義兄の妹夫婦も来ていた。高志が二人に会うのは二度目になる。十年前に東京で行われた美佐子の娘の結婚式で知り合い、式のあと彼らの家で温かくもてなしてもらった記憶がある。

この妹もまた、人と接する面においては文句なしに温和で朗らかな人だった。彼女のもつ親切心に満ちた人柄については美佐子からも聞いていた。お義姉さんには何かとよくしてもらったと感慨をこめて話していたこともある。高志は彼女と再び接していて得心した。確かにそのとおりの人物だと。

だが闇も隠れているだろう。むかし聞いたことがある。彼女は若いときに行方をくらませて、義兄とは数十年も会えなかったという。何があつたのかは高志のあずかり知るところではない。でも、これほど温和な妹を失踪に駆り立てる何か

が小樽時代にあつたのは事実には違いない。

そう考えると、義兄にもまた高志が知りえない深い心の闇があつたのではないかという気がするのだつた。義兄が中学生になりたての多感な時期に母親が男性と同棲をはじめ、その人との間に男の子を産んだという話も聞いた。

その子のことは高志も偶然知っている。美佐子の結婚式のときに義兄の弟だという人に話しかけられたが、まさにその人なのだった。

「覚えてますか。僕は小樽工業の電気科で一年後輩だつたんですよ」

「ああ、覚えてる覚えてる。よく廊下ですれ違つたよね。驚いたなあ。あなたが弟さんだつたとは」

苗字は違つていた。二十年ほど前にこの男の子が誕生してから家庭は新しく生まれた弟を中心に回りだしたのだろうか。その狭間で義兄が横浜の菓子屋に奉公に出たことを高志は聞いた。妹が失踪したのも同時期だという。もしかしたら二人の居場所が小樽からなくなつてしまつたのかもしれない。

しかし分らない部分が多すぎる。義兄には幼いころの写真がほとんどなく、そのことを美佐子が尋ねるとひどく癩癩を起こしたという。思い出したくない闇があつて、それに触れることを許さなかつたのだろう。

それ以外には全くといっていいほど高志は義兄の過去を知らない。何があつたのだろうか。心を歪めるいかなることが義兄を取り巻いていたのだろうか。そのことは解けない謎となつたが、あえて姉に確かめてみたいという気にはならな

つた。いや、たとえそういう気持になつたとしても、それは今ではなく遠い将来に違いないだろうと思つた。

齋場の夜も更けた。高志の中で固まつていたものが溶け出していった。心の底に滞つていた万年氷がきしみだした。音もたてずに。血液の中に染み込んでいるようだった。通夜の会場から個室に移動するとき高志はひとりで祭壇の前に行つた。部屋はすでに暗い。灯明は赤い静かな光をそそいでいる。

柩に近づく。おそろおそろ義兄の遺体をのぞいて見た。死に化粧した義兄の頬は灯りのせいで血が通つて見えるように見えた。衝撃を受けた。それは実に静かな死に顔だつた。かすかに微笑んでいる。子どものように小さく縮んで瘦せた義兄がなんとも哀れに思えた。そのとき高志の目には素直に哀悼の涙が浮かんでいた。それは溶け出した氷の雫に違いなかつた。

涙で視界が消えた。ハンカチで目頭をぬぐつてから顔をあげ、祭壇の上にある遺影を見つめた。文句をつけようがない穏やかな表情だ。撮影したとき、傍には子どもや孫がいたのかもしれない。この眼差しのなかには一つも欺瞞を見いだせなかつた。

亡くなる前の闘病期間について、「思えば、この半年が最も夫婦らしい期間だつたかもしれない」と美佐子は語つていた。そのときに義兄が見せた素直で周囲への感謝に満ちた表情もこれに通じるものだろう。そのときの想いを引き継いだまま義兄はいま横たわつているのかもしれない。

齋場に用意された、宿泊のための個室に向かいながら、食事の席で美佐子の娘が話していた言葉を思いだしていた。七歳になった男の子に義兄が自転車を教えたのは一昨年の春だったという。そのとき、孫に対して見せた笑顔も遺影にあるのと同じような穏やかなものだったに違いない。同時期に下の女の子が一歳を過ぎて歩きはじめた。その愛らしい様子を見つめていたときの表情もおそらくそうだったのだろう。

そんなことをあれこれ考えながら高志は齋場の一室で身を横たえた。良子がかいがいしく明日の衣服を整えているあいだも黙って格子の天井を見つめていた。やがて、良子も床につくことになり、部屋の大きな照明が消され、就寝用に切り替えられた。高志はぼんやりとした、ほの赤い天井に相変わらず目を注ぎ、意味もなく格子の数を数えていた。

やがて良子の寝息が聞こえはじめた。義兄の生涯は依然として謎めいて脳裏に横たわっていた。そのとき唐突に和菓子の甘い味が思い出された。数ヶ月前に美佐子は電話で話していた。

「これがあの人の作った最後のお菓子なの」

それを口にしたのはつい昨日のことだ。冷凍しておけば長期の保存がきくということで大切に食していた。自分は昨日にかぎって食することをためらった。義兄の死が秒読みの段階を迎えていたわけで、いつ知らせを受けてもおかしくない状況だった。あのとき自分を躊躇させたものは何だったのか。美味な栗菓子を中心にしながら、何とも説明し難い哀しみがこみあげてきて思わず涙がにじんだのだ。

そんなことを思い出した高志は、口中に激しい渴きを感じ、枕もとのペットボトルから音をたてて水を飲んだ。粘膜を通して冷ややかなものが染みていく。だが心は依然として乾いていた。潤すものが欲しかった。自信めいたものが喪失していた。許せるものと許せないものが混在して回転している。すべてを流し去る雨が欲しかった。疲労が休息を欲している。意識が遠のいて深い森に入った。

泥のように眠った高志がふと気がつく、明け方が近いのか、暗かった窓が白みはじめていた。そのままぼんやりと寝床にまどろんでいると、齋場の屋根やガラス窓を静かに打つ雨音が聞こえはじめた。

手洗いに立った高志は、北国と変わらない寒さに震えながら再び布団にもぐりこんだ。相変わらず静かな音が枕辺に響いていた。四月の花冷えを感じさせる雨音だった。乾いていた道路や屋根を湿らせる優しい音、雨トイを伝って流れているに違いない、染み入る音がする。

「北海道も雨なのかな。このあいだ工場に取り付けた雨トイはうまく水流を運んでいるだろうか」

そんな仕事のことも頭をよぎった。そうしているうちに、いつの間にか再び浅い眠りに落ちていくのが自分でも分かった。昨夜とは違う、どこか安らかともいえる心地よさがあり、脳裏には依然として雨音が子守唄のように響いていた。

別の物音がして目覚めると、良子が起きて服を着始めている

た。

高志は眠そうに声をかけた。

「今朝は雨だね」

「え？ 雨……」

彼女は意外な顔をして窓を開けた。

「雨なんか降っていないわよ」

「そんな……雨音がするじゃないか」

「壁にかかっている空調の音よ」

「え？ 空調の音」

信じられない思いで高志は起きて窓の外を見た。確かに外には一滴の雨も降っていないかった。雨の音であると思ひ込み、春の冷たい雨音とはこういうものか、桜の花びらを石畳に貼り付けながら地面をしつとりと潤しているのだろうか——。そんな映像を頭に描きながら情緒のある風情を感じていたのはとんだ思い違いだったというわけだ。

高志が思いなおして改めて音を聞くと確かにそのとおりだった。古いエアコンの送風機が巻き起こす騒音に過ぎないことを高志は悟った。

「いや、まいったなあ。自分はどうかしている。これはドラマの効果音にそのまま使えるぞ」

巧みなプロデューサーにしてやられたという感じがした。それと同時に人間の感覚というものが、いかに当てにならないかを思い知らされた。

これが現実なのか。

壁の鏡に顔を映してみる。

疲れた顔だ。

「思い違いなのか……」

自分の中から生きていくことへの自信めいたものがゆるぐ気がする。

「こうした思い違いの積み重ねのようなことが、気づかないうちに人生の途上でしばしば起こっているのだろうか」

そうつぶやいたとき高志は苦笑していた。それは動かしがたい巨大なものの前での諦めに似た笑いに思えた。

再び喉の乾きをおぼえた。

全身が乾ききっている。

良子がいれてくれた緑茶で体を潤した。

すっかり目がさめた高志は再び立ち上がった。

大きく両手を広げてみる。

少し開けた窓からそよいでくる朝の風をおもいきり深く吸い込んでみた。

了

（文芸思潮、第十一回銀華文学賞佳作授賞作
品を構成し直したものです）